



通信

VOL.7

令和2年3月15日

作成：長岡正宏



「和」から「話」へ。「和」なくして、「話」はない。そして「輪」が産まれる



2月22日に北平道場長の四十九日法要と納骨式が執り行われた。



合気の旅
合気会本部道場の最寄のバス停は「抜弁天」である。抜弁天とは抜弁天厳島神社のことである。開祖がここをお参りした記述は見当たらないが、開祖の性格を考えると多分お参りされているだろう。安芸の厳島神社から由来していると思うと嬉しくなる。

新型コロナウイルス感染防止のため、道場が閉鎖されている。稽古が出来なくなることだろう。だが、合気道の身体及び心の使い方は日常生活でこそ生きてくるのである。日常即稽古であることを忘れないで欲しい。

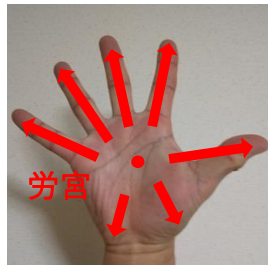


白石兄弟、10級取得おめでとう！



昇級審査(5級)、平田パパ緊張気味???

○ワンポイント・アドバイス



手の中心は、労宮(ろうきゅう)と呼ばれるツボになる。ここから「気」が入り出している。

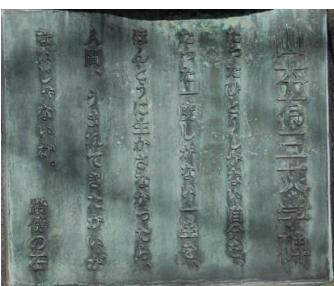
手を力強く広げてみよう。労宮を中心に広がっていくことが感じられるだろうか？これをハッキリと自覚してもらいたい。

また手を握る時も同様で、労宮を中心に閉じられる。

木剣や杖を振る時、左右の労宮で木剣や杖の軸(芯)を握るようにすると威力が増してくる。(決して強く握るのではない)

俗にいう「朝顔の手」「茶巾絞り」などは労宮を中心に表現している。

労宮の感覚が分かってくると、腕も更に活かされてくるだろう。



道心探究
18歳の時、山本有三の『路傍の石』を読み終えて、栃木県栃木市へ向かった。
山本有三の墓参りをして、大平山謙信平を目指した。そこには山本有三文学碑があるからだ。
たったひとりしかない自分を、たった一度しかない一生を、ほんとうに生かさなかつたら、人間、うまれてきたかいがないじゃないか。
主人公の少年吾一が先生に説教される「路傍の石」の一節だ。名言といっても良い。
18歳の時に何故ここへ来たのか明確に思い出せない。しかし、その後の人生において、この一節が私のバックボーンになっていたことは間違いない。
5年前の51歳の時に再訪した。南に広がる広大な関東平野を眺めていたら、高齢になった吾一が私に「せっかく合気道をしているんだから、もっと自分を生かさないか、もったいないじゃないか」と語りかけてきた。それからだ、道場と深く関わり始めたのは。



～先人の言葉～

相手とぶつかるから、(自分の)体がまわる。

一広島での講習会において一

合気会本部道場師範 山口清吾